

松葉屋通信



「山と森、木と人々の暮らし」を一本の糸でつなげたい

ありえないほど大きな木と会いに行きました。

この木たちは今も生きています。

自然の中で立っている木と
人の手で切られ倒された木。

ある山の仕事人が話してくれたことがあります。
「木は人間に使われたがっているんだよ」って
それは本当でしょうか？

「生きる」という意味を考えていくと

切られた木は確かに生物的には死んでいる。
人が道具として使い続けることで生きることになる。

言い方を変えると

「そのまんまの木」と

「使う木」と言っているのかもしれない。

切られた木は何を思っているのか。

もし僕と話すことができたら

どんな話を、

何を語りかけてくれるのでしょうかね。

人の一生を遥かに超えた年月

木の年輪を見ていると生きた証がはっきりわかります。

たとえば僕が生まれた1958年がここ。

僕の祖父が生まれた年がここ。

息子が誕生したのがここ。

木はただただ淡々と

地面から水をすい

太陽の光を受け

二酸化炭素を固定しデンプンなどの有機物を生成する。

その過程で酸素を放出するだけ。（実際はもっと複雑な

メカニズムらしい）

でもこれが木が生きているということ。

そして信じられないほど長い時間を体に刻みこんでいる。

今回はそんなことを考え巡らせてくれる

二種類の大きな木に会いました。



鹿兒島に行ってきました。



鹿兒島県屋久島から霧島へ、大きな木をたくさん見て歩いた旅でした。蒲生の楠の木は鹿兒島港から霧島へ向かう途中、看板に惹かれ「大きな木が見れる！」と急遽立ち寄ることにしました。鹿兒島県始良市蒲生町の蒲生八幡神社境内にあるこの楠の木は、遠くからは何本かの木が合わさり生い茂っている森のように見え、近づいて全体像が見えたとき錯覚かと疑ってしまうくらい大きな姿に圧倒されました。

ボコボコとした樹幹に苔や草や蔦がくっついている姿が、いろいろな生き物と一緒に暮らして住処を提供している森の大家さん、といった感じです。

どっしりとしていておおらかなのに、枝葉がクネクネと夜になったら歩き出すんじゃないかという躍動感があって、どことなく愉快なところが気に入りました。

暖かい地方の木だからか、普段見慣れた長野の木よりものびのびしていて、見ているこちらの心も広く暖かくなりました。 池田奈美子

国指定特別天然記念物
蒲生のクス

DATA

所在地：鹿兒島県始良市
推定樹齢：1500年
根廻り：33.57m
樹高：30.00m



木に扉がついているなんて、子どもの頃に「こんな家がいいな」と描いた絵を思い出しました。木の中に8畳ほどのスペースがあるそう。入ってみたいですね。

松葉屋図書館・まつの文庫 — 店内で自由に読んでいただくことができます。

おすすめの1冊



『世界の巨樹・古木 歴史と伝説』

著者：ジュリアン・ハイト
発行所：株式会社 原書房

北から南、東から西へ世界中のおどろくほどの大きな大きな木がページをめくるたびに登場します。

南アフリカのバオバブ、アメリカのセコイア、

スウェーデンのオーク、日本の京都の桜や屋久島の縄文杉も肩を並べます。樹齢が数百年、数千年という古木も多く、その木にまつわる歴史も紹介され、木を知ることでも楽しい本です。

この本に載っている樹1本でもいいからいつかは訪ねたい、旅心がくすぐられました。

ほかにおすすめしたい、木の本。



「森ではたらく! 27人の27の仕事」

編著者：古川大輔・山崎亮
発行所：株式会社 学芸出版社

森で狩る人、森を探る人、森を運ぶ人・・・林業作業だけではない森と関わる仕事がいかにたくさんあるのだと気付かされました。森と関わりを持ちたいと思っている人はきっとヒントがもらえる一冊だと思います。



「木を知る・木に学ぶ なぜ日本の桜は美しいのか?」

著者：石井誠治
発行所：株式会社 山と溪谷社

読んだら一気に木に詳しくなれて、疑問もスッキリ。木の見方が変わって理解がぐっと深まります。そして、身近な木のことももっとも知りたくなります。木が好きな方はぜひ読んでいただきたいです。

松葉屋通信 VOL.37



発行所：
松葉屋家具店+くらし道具学研究所
〒380-0841 長野市大門町 45

TEL : 026-232-2346

FAX : 026-237-4558

Email : since1833@matubaya-kagu.com

定休日：水曜

発行日 2017年2月11日

自然の中で生きてきた木

冬、戸隠神社・奥社を訪ねました。

戸隠神社・奥社参道のミズナラ

戸隠神社・奥社の参道



DATA

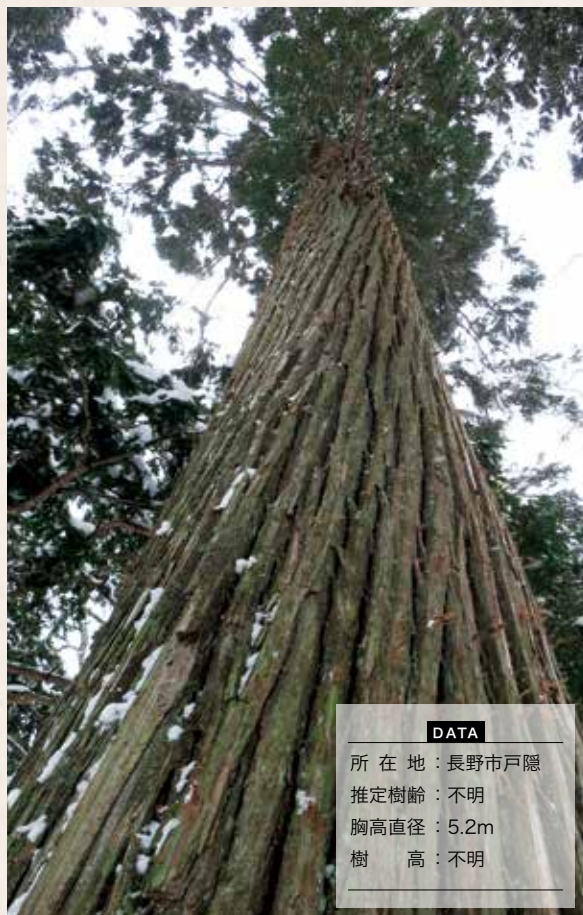
所在地：長野市戸隠
推定樹齢：不明
胸高直径：6.0m
樹高：不明

2016冬 森へいくツアー



戸隠神社・奥社参道を右に少しそれて歩いていきます。夏は湿地帯で冬、雪が降り積もらないと入っていけない場所に大きなミズナラがありました。まるで広場に勝ちほこったように枝を広げられるだけ広がっています。まわりの木々は淘汰されたのでしょうか。木々たちを従えているようにも見えました。胸高直径は実測で6m、高さは実測できませんでしたが、20mちかくありそうです。

日本神話にある、天照大神が天の岩屋に隠れた時、無双の神力をもって、天の岩戸を開いた天手力雄命を祀ったといわれる戸隠神社。奥社参道の中ほどにある随神門を越えると、景色がガラッとかわります。随神門から参道をはさんで500mにわたって300数本の杉が美しい並木をつくっています。神々しいとはこのような景色でしょうか。夏や秋もうつくしいのですが、冬の雪景色は特別です。平成元年の旧環境庁調査では目通り3m以上の杉が179本(推定)あるといわれています。



DATA

所在地：長野市戸隠
推定樹齢：不明
胸高直径：5.2m
樹高：不明

戸隠神社とは？

霊山・戸隠山の麓に、奥社・中社・宝光社・九頭龍社・火之御子社の五社からなる、創建以来二千年余りに及ぶ歴史を刻む神社です。その起こりは遠い神世の昔、「天の岩戸」が飛来し、現在の姿になったといわれる戸隠山を中心に発達し、祭神は、「天の岩戸開きの神事」に功績のあった神々をお祀りしています。



萱葺・朱塗りの随神門から、奥へと続く杉並木を望む

人の手によって、これから育まれる木

岐阜銘木協同組合を訪ねました。



幅も長さも色も、こんなに綺麗に一枚板として取れるものはありません。磨く前の荒木の状態でも光って見えました。

「木の底力」を知っている人たちが訪ねました。こんなに豊富に銘木が集められる日本でも屈指の場所です。

銘木市には丸太のままの原木や製材されたばかりのたくさんの一枚板が日本全国から集まっています。

複雑な形をしたもの
土の下に埋もれていた埋もれ木
すら一とまっすぐにのびた長い檜

立っていた時はどんな姿だったのだろうか
と想像せずにはられないような

銘木ばかり。

そのたくさんの中から「これは」という木を買い付けるのですが乾燥状態も様々な一枚板は一見するとどれもきれいに見えるもの。乾燥していくうちに使い物にならないくらい反ったり割れたりしてしまうものの中にもあるため買い付け段階と仕上がりとの狂いの差が少なく美しい仕上がりになることを予想しながら見極め選定するのは長年の経験と知識がなければできません。

たくさん見た一枚板の中でも幅が80センチを超える一枚板は数も少なく、栗、檜、山桜・松葉屋にある馴染みの一枚板がとて貴重なものであるということが今回改めて分かりました。

今回買い付けした一枚板は、1年から数年かけて乾燥、製作して松葉屋に展示されます。



まだ製材される前の柵の原木。曲がったり、よじれたたり、枝分かかれていたり、木肌には苔や植物がついている。生きていた時の姿が想像できるようなダイナミックな形をしていました。



見上げる首が痛くなるほどの長い長い檜の一枚板。壁面にずらりと並び迫力があります。



水々しい製材したての山桜を一枚一枚選定しています。

【岐阜銘木協同組合】

全国各地から届く各銘木を一堂に集荷展示して市売にて販売する専門市場です。(ホームページより) 毎月市があり、全国から500〜700名もの人が集まるといいます。ケヤキの取扱高は日本でも一番。